

## BOOK REVIEW

### Up, Up, and Away (アップ、アップ、アンド アウエイ)

Reviewed by Nobuaki Suyama\*

**BOOK REVIEWED:** ジョナー・ケリ著『アップ、アップ、アンド アウエイ： ザ・キッド、ザ・ホーク、ロック、ヴラディ、ペドロ、大きなオレンジ、ユッピ！ 狂気の野球ビジネス、不運だったけれども忘れられないモンリオール・エキスポズ』ランダムハウス・カナダ、トロント、2014年。  
*Jonah Keri. Up, Up, and Away: The Kid, The Hawk, Rock, Vladi, Pedro, Le Grand Orange, Youppi!, The Crazy Business of Baseball, & the Ill-fated but Unforgettable Montreal Expos.* Random House : Canada, Toronto, 2014.

エキスポズがモンリオールから去ってからちょうど10年になる。1969年から2004年の36シーズンの長い間、アメリカ文化の象徴とも言える野球のプロチームがフランス語の都市モンリオールに存在したのは一見すると不思議な歴史である。1967年のモンリオール万国博覧会に因んだ名前が付けられたエキスポズは、初めてアメリカ合衆国の外に置かれたメジャーリーグ・フランチャイズとなった。

モンリオール出身で現在はコロラド州デンバーを住処とするジャーナリストによって著された本書は、エキスポズの始まりから終わりまでの出来事を詳細に記述し、単なるスポーツ史に止まらずに比較文化に彩られた国際経営的な視野も踏まえて野球チームを分析し、更には、ワシントンDCに移った後の現在に至るまでフォローアップしている。題名は、ホームランが飛び出す度に地元の名物実況

---

\* 陶山 宣明 Assistant Professor, Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University, Tokyo, Japan.

中継アナウンサーが叫んだ表現に由来している。副題には、名選手のニックネームに加えてホーム球場のマスコットの名前が連なっている。エキスポズが終焉してまだ日を浅くして書かれた *Remembering the Montreal Expos (Gallagher)* と合わせて読むと、理解がより一層深まる。著者自身がリアルタイムでエキスポズ体験をした生き証人だが、記者の本分で北米各地に散らばっている元選手、監督、コーチ、職員、及び、財界人、メディア関係者などを数年の内に120人以上もインタビューして古い知識を掘り起こした労作である。

著者ケリは、前著 *The Extra 2%* で、どん底にあったタンパベイ・レイズを急上昇させてワールドシリーズまで導いたウォールストリート出身のビジネスマンたちの経営手腕を高く評価した。映画化もされたマイケル・ルイス著『マネー・ボール』で描かれたオークランド・エーズと同様に、他の球団の成功例を知ると、エキスポズも状況に応じた創意と工夫で下方に向かった運命を好転させることができた可能性はあったように思える。

モンリオールでは、野球熱が1960年代に俄かに降って湧いたわけではなく、それまでもロイヤルズの長い伝統があった。ドジャーズ傘下のマイナーリーグ(3A)チームが1960年シーズンまで「北米のパリ」で熱戦を繰り広げ、野球はケベック州全体に浸透していた。アイスホッケーは一年を通して楽しむことができるスポーツではないため、夏にするのにも、見るのにも、野球は格好のスポーツとなっていたのである。

メジャーの各リーグは、1969年のシーズンから2チームずつ増やすことになった。ナショナル・リーグの一つ目のサンディエゴは難なく決まったが、モンリオールは二つ目の椅子を巡ってバッファロー、ミルウォーキー、デンバーなどのアメリカ諸都市に加えてトロントとも競い合った。ロイヤルズがドジャーズの傘下だったため、モンリオールが馴染みの深いナショナル・リーガー一本に絞って申請したのは自然な成り行きである。1968年5月27日、リーグ拡大委員長ウォルター・オマリーがモンリオールに決まったことを発表したのが、翌年4月にいきなり開幕なので、かなりの強行スケジュールだったことは確かである(6-7)。メジャーで初めて東西の地区制が採られ、エキスポズは東地区に入り、フィリーズやカージナルズなどの古豪と鎬を削ることになる。

1960年代とは、ケベックは静かな革命を経験し、自由党州政府の下で古いケベックは刷新されて、州全体が自信に溢れていた時代であ

る。そこに名物市長ドラポーが大きな役割を果たすことになった。カナダが百年祭として万博を開催するべきだと連邦政治家が提唱したが、ロシア革命 50 年を祝おうとしたロシアに敗れた。ところが、モスクワは 1962 年、突然辞退したため、ドラポーが強力にモントリオールを売り込んで奪取、セントローレンス河に急遽人工の島を作って会場を準備するなどして、万博は首尾よく終えた。見切り発車的に世界クラスのイベントを成功させた後で、たかがアメリカのスポーツの本拠地化など簡単だと考えたとしても何ら不自然ではなかった (2-3)。それどころか、モントリオール市は既に 1976 年夏季五輪の招致に向けて動き始めていた (12)。

エキスポズの一年目は、当然ながらエキスパンション・ドラフトで既存のチームが不要とした選手を採ってロースター(登録選手リスト)を埋めたが、そこで確保した選手を撒き餌にしてヒューストンからうまく釣った強打者ストーブが中軸を担った (25-29)。大型野手で赤毛だったため仏語でル・グラン・オランジュ(大きいオレンジ)と呼ばれて親しまれた背景に、アメリカ人ながら仏語を学んだことが大きい (54-56)。しかし、この揺籃期に足繁く球場に通っていた観客、それも少年ファンにとっての一番のお目当ては、どうやら、エキスポズの選手ではなく、対戦相手のスター選手だったようである。そうした中の一人が、パイレーツのスター Jewel であった (52-53)。

その後、ドラフトで採った生え抜き選手を大切に育て上げ、1979 年から 1983 年にかけて黄金期(毎年 A クラス)を迎え、常に優勝を狙えるラインナップを作り上げていた。エースがロジャーズ、二番手にガリクソン、捕手カーター、一塁手クロマティ、二塁手スコット、三塁手パリッシュ、遊撃手スパイアー、外野にレインズ、ドーソン、ウォラックと言った布陣である。生え抜き(homegrown)とは、植物の比喻から、苗木がファーム(farm)で植え付けられて十分に成長してから、本フィールドに移されることを意味している。そうした意味で、この頃のエキスポズの主力選手は揃って生え抜き選手である。1982 年のオールスター・ゲームはモントリオールで開催され、何と 4 人ものエキスポズ選手がナショナル・リーグ選抜チームのスタメンに名前を連ねた (187)。

ストライキでシーズンが分断された 1981 年、後期地区優勝を果たしたエキスポズは前期優勝のフィリーズとのプレーオフに勝利し、ドジャーズとのリーグ優勝決定シリーズを闘うことになった。2 勝 2 敗の後を受けた最終戦は 10 月 19 日の月曜日にモントリオール・オリン

ピック・スタジアムで行なわれたが、九回の表にロジャーズは高目に浮いた球をマンデーにスタンドまで運ばれ、決勝ソロホームランとなった。あともう少しでカナダにワールドシリーズを呼び込めるところだっただけに、永遠に悔やまれる失投であり、この悲劇は「ブルー・マンデー」として後世にまで語り継がれることとなる（173-86）。

トロント・ブルージェイズが二年連続してワールドシリーズを制したのに対して、エクスポズは結局たった一度の地区優勝を手にしただけだった。ところが、1994年に名将アルー（父）の下でエクスポズは快走し、ストライキでシーズンが中断された時点（8月12日）で東地区の二位のブレーブズに6ゲーム差をつけていただけでなく、勝率6割4分9厘はリーグ全体でも一番で、A・リーグでトップのヤンキーズの勝率をも上回っていた。結局、ストライキは收拾せず、この年は公式戦の優勝も決定することなく、プレーオフは全てキャンセルされた（309-10）。幻の王者エクスポズには、P. マルチネス（エース）、ウェッテランド（抑え）、フレッチャー（捕手）、フロイド（一塁）、ランシング（二塁）、ベリー（三塁）、コルデロ（遊撃）、アルー（子）（左翼）、グリソム（中堅）、ウォーカー（右翼）の面々がいた。1992年、1993年も地区二位だったので、決してこの年の活躍がフロックではないことが分かって。1981年と言い、つくづく、エクスポズはストライキと縁が深いチームだった。

エクスポズの愛称ノザムール「僕らの恋人」は赤白青のユニフォームと帽子を付けたらどこの国の出身でも構わないし、実際ドラフトで選ぶ際にも最優先されるのは本人の能力で、国籍、人種、言語などはほとんど意識されていない。とはいえ、やはりケベック州出身の選手がエクスポズに現れることには特別な意味があり、モンリオール近郊で生まれ育ったレイモンやブシェの登板にはより大きい歓声が上がった（299）。エクスポズの初期に、野球用語は整合的に仏語に直された（56-59）。ストライクはプリーズ、アウトはルトレと訳された。また、ナックルボールがバル・パピヨンとなったのは、投手が投げた球が「ちょうちょ〜、ちょうちょ〜」と飛んで来るからであるが、面白い発想であった。独立を標榜するケベック州政府は、1977年にケベックの公的仏語化を完遂するための言語憲章を制定したが、この野球の仏語化は政治を先じた文化的な動きである。

2004年を最後のシーズンとして、遂にエクスポズは南への移動が決まり、ナショナルズとして生まれ変わった。ブルージェイズはエクスポズの年齢を超えたが、トロントがフランチャイズを失う話は現実

化していない。ただアイスホッケーの町モンリオールに野球はそぐわず、本来居るべき場所に戻ったというだけでは、なぜエクスポズは36年で幕を閉じたのかの十分な答えにならない。逆に言うと、エクスポズは北の都市で36年も存続し、第一期黄金時代にはリーグ平均を上回る数の観客がホーム球場に詰め掛けているのである(130-31)。NHLのシーズンと大リーグのシーズンが被る月もあるが、原則として季節を逆にするため、一人が同時にアイスホッケーファンと野球ファンであることに大した矛盾は生じない。

著者は、いくつかの重要な指摘をしている。ひとつは、8年間エクスポズはカナダで唯一のチームとしてカナダ全体でサポートを受けてテレビの放映権も享受したが、トロントにチームが出来てからエクスポズの市場はカナダでもケベック以東に狭められてしまったこと(212-16)。また、市、州政府、財界からの応援が不十分で(249-51)、俄か仕立てのジャリー・パークで始め、1977年に五輪のメイン会場であるビッグ0に本拠地を移したが、最後まで野球専用の良質球場を手にすることができなかったこと(134, 215, 309)。更に、スターをじっくり育ててキープしてチームの永劫の顔とできず、いい選手をファンの期待に背いて手放してしまった点も無視することができない(92-93, 261-62, 354)。また、オーナーのチャールズ・ブロンフマンの野球熱が冷めてしまったことも多分に影響している(236)。加えて、カナダ・ドルの米ドルに対する交換レートが著しく悪くなっていたことも、エクスポズの経営を苦しめたのであった(215, 250)。

### Works Cited

- Gallagher, Danny and Bill Young. *Remembering the Montreal Expos*. Toronto: Scoop Press, 2006.
- Keri, Jonah. *The Extra 2%: How Wall Street Strategies Took a Major League Baseball Team from Worst to First*. New York: Ballantine Books : ESPN Books, 2011.